四月雑感

飯島日出美

三月に卒業式をすませ、その日の感慨にふける間もなく、私たちは新学期を迎えなければなりません。四月、新学期といえば、何よりも先に、登園をいやがり泣き叫ぶ子どもを抱きかかえ懸命になだめすかしている私自身の姿を思い浮かべます。最近、家庭での幼児教育に対する関心が高まり、入園当初の幼児の社会性も相当に発達しているもようですが、それでも一級に二、三人は登園をいやがる子どもがおります。いやがらないまでも、極度に緊張し、ささいなこと、——例えば靴がうまく履けないとか、誰かとぶつかったとか、先生の姿が見えなかったというごとで、すぐに泣き出します。

また入園当初の園児たちは、たいへんお行儀がよく、私どものことばに対して、口を揃え「はーい」と返事をしてくれます。しかしながら、容易なことには笑顔を見せてくれません。

九月・運動会の頃にもなれば、雀躍りして喜ぶ人形芝居を見ても、ただまじめに、懸命に見ているだけで、よほどおもしろい場面に出合っても、そっと頬の筋肉をゆるめ、隣りの子の表情をチラリと密かにうかがう程度です。

ですから、新学期の私たちは、ただひたすら、園児たちの心の底からの大きな笑い声を聞きたいばかりに、あれこれくふうし努力している、とさえ言えると思われます。何よりも、園児たちの緊張がほぐれ、本来の姿そのままの姿で幼稚園生活を過ごすようにならなければ、真の教育は出来ないと考えるからです。私など、たえず、ラジオの「歌のおばさん」のように優しい声、「テレビのおばちゃま」のような微笑をもって、園児の緊張緩和に努めるべく大わらわです。

私は日頃「歌のおばさん」の声を聞くたびに、何となく気恥ずかしく感じ、「テレビのおばちゃま」の表情を見ては、くすぐったい思いをするものです。幼稚園での私自身、あるいはその他幾人かの先生がたを思い起してのことでしょう。

ですから、テープやフィルムで私自身の姿を見せつけられた場合は、なおさらのこと、何ともいやな気分にとりつかれます。あんなに過分に、優しく、愛で慈くしまれたのでは、さぞかし子どもたちも迷惑であろう——と、これは、私の思い過ごしで、多少ひねくれた感じ方かもしれません。しかしながら、幼稚園と、テレビ・ラジオは別のもの、もっと自然な態度で、自然な音

声で、しかもなお、子どもたちの心を完全に把握出来たとすれば、それこそすばらしいことだと思うからです。

私の勤務している幼稚園に、A先生というこの意味ですばらしい先生がおられます。A先生は、特別熱心に保育理論や保育原理、幼児心理の勉強をしておられるわけではありません。また、十年という経験があるにしても、保育技術についての研究をしておられるわけでもありません。はじめ私は、A先生と私の違いは、経験の差であると考えていました。ところが私も、先生生活五年になってみて、しみじみ考えるようになりました。保育者にも天才がある、と。

A先生の態度は全く自然で、入園当初の園児に対しても、卒業間近の園児に対しても、同じように、さり気なく、のんびりと、愉快そうに接しておられます。「子どもの叱り方」で禁じられている幾つかのことばもA先生の口を通しては、異なった意味を持つのではないかとさえ思われます。

「先生は泣く子、きらいよ」と朗らかに言ってのけ、後に何のいやみも残されないようです。

私どもの幼稚園では、車の往来の激しい青梅街道を横断して通園している園児が相当ありますので、毎朝先生がひとり、園児の横断を監督しております。九月・十月と、園児たちが、園生活にも慣れ、各々の自我を発揮する頃になりますと、この、先生の監督をきらってひとりで横断しようとする子どもが必ず出てきます。

あっと思う間に車の合間を抜けて駈け出し、ひやりとさせられることも、一度や二度ではありません。いつでしたか、このことで、反逆児はA先生の級の子どもたちである、と苦情の出たことがありました。翌日、A先生は、級の子どもたちを集め、お話をされました。

「きのう、皆が帰ってから、お巡りさんが、いらしたのよ。ポケットから、こうやって手帳を出して、『ねずみ色のガウンを着て胸にハンカチをさげているのは、井草幼稚園の子どもだと思いますが――』ですって。先生は誰かけがをしたのかと思って、びっくりして、『はいそうです』って言ったの。

お巡りさんは『名前も大体分かっているのですが――。どうも朝、青梅街道を渡るのに、さっと飛び出して、あぶない子どもがいますね。あれは全く危い』って、おっしゃるのよ。『ここの幼稚園の子どもたちは、皆先生の言うことを聞いて、ちゃんと危くないように渡っているはずですから、きっと、よその子どもさんじゃないでしょうか』って、先生はお返事したんだけれど、どお？　そんな事あったのかしら？」

子どもたちは互いに顔を見合わせ、反逆児は顔を赤らめ、具合悪そうにしています。

そのうち、ひとりが「Yちゃんだ！」

「だってKちゃんだって、Tちゃんだってやったじゃないか」　「あら、そう。やっぱり井草幼稚園の子どもたちだったのね。これから気をつけてね。じゃ先生はお巡りさんに電話をかけておきましょう」

問題は解決しました。お巡りさんとお医者さんをこわい者にしてはならない、とかたく信じている私は、この様子を見ていて驚きました。これは、民主主義時代の、お巡りさん利用法かな、と感心いたしました。こんなことがあったからといって、子どもたちは別にお巡りさんをこわがりもせず、散歩の道すがら交番の前を通りかかると、「お巡りさん、お巡りさん」などと歌いながら手を振っています。

月曜日の朝など、級の子どもたちにお話をしておられるA先生の姿をよく見かけますが、聞いてみますと、「きのうお洗濯をたくさんして竿に干したら、風が吹いて、拡げても拡げても、片端に寄ってしまった」などというお話です。それを派手な身振りもなく、自然な音声で淡たんと話されるのですが、子どもたちは引き込まれ、心から楽しそうに聞いています。またA先生が、電車の事故で遅れられた時などにも、電車が、二、三台ストップしたために、いかにホームが満員になり、いかにして電車に乗り込み、押し込まれ、もまれもまれて荻窪に到着したかを興味深く話し聞かせておられます。

子どもたちは先生が大好きで、「お母さんより好きだ」とか、「大きくなったら、自動車を買ってA先生を乗せてあげるんだ」などと、父兄や子どもたち自身から、A先生賛美の声を聞かされることはたびたびです。このように、A先生の姿が深く子どもたちの心にやきつけられているのは、保育者としての資格うんぬん以前の問題ではないかと思います。ある人とある人との間ではことばが通じ心が通うのに、ある人とある人の間ではことばが地に落ち、心は壁に遮られる類の問題のように思われます。A先生は、先生である以前に子どもたちの仲間であるようです。

教育者はまず子どもたちの友だちになれ、と言われますが、これはどうして、なかなかむずかしいことです。真の意味で子どもたちの仲間である保育者は天才保育者だと私は思います。

勿論、天才保育者すなわち優秀な教育者という意味ではありません。天才保育者とはいえはっきりした教育目標を持ち、その目標への不断の努力があってはじめて優秀な教育者であり得るものと考えます。また非天才保育者にしても同じこと、教育への情熱と努力が優秀な教育者への道を開くことでありましょう。

どこの幼稚園・学校にも、この意味での天才教育者がおられることでしょうが、私はそれらの先生に接し、天才の要因が何であるかを、深く探ってみたい誘惑をしきりと感じます。

今年も四月、天才でない私は、「歌のおばさん」と「テレビのおばちゃま」で、新学期を始めねばなりません。苦労が多いとは言いながら、同じようにおとなしくかわいらしい子どもたちが、一人ひとりあばれん坊に、きかん坊に、理屈屋さんに、弱虫に、優等生にと変ってゆくのを見守っているのは本当に楽しみなことです。

（東京・井草幼稚園）